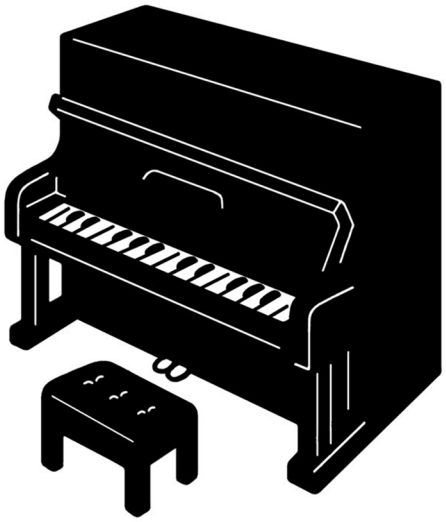
ルイザ・メイ・オルコットの『若草物語』
―越えて伝わる波動―

『若草物語』
～ Little Women ～

アメリカ公開　1994年12月、日本公開　1995年7月
監督　ジリアン・アームストロング
出演　ウィノナ・ライダー、ガブリエル・バーン他
原作『Little　Women』　ルイザ・メイ・オルコット
翻訳『若草物語』集英社ほか

作者であるルイザ・メイ・オルコット（Louisa May Alctt, 1832-88）が自身の家庭環境や経験をもとに書いた自伝的小説の映画化最新作。舞台は、19 世紀後半のアメリカ東部。マーチ家の四姉妹、妹たちを深く愛し、家庭的で美しい長女マーガレット（メグ）、小説家志望で涙もろく、時に繊細な次女ジョセフィン（ジョー）、病気がちでおとなしい性格だが、自分のことよりも他人を気遣うことのできる優しい三女エリザベス（ベス）、おませでわがままだが、誰からも愛される四女エイミー、のクリスマスから翌年のクリスマスまでの様子を描いている。彼女たちは母であるマーチ夫人や周りの心優しい人たちに見守られながら、様々な困難を乗り越え、すくすくと成長してゆく。年頃の子供たちを描いている作品だからこそ、誰もがどこか懐かしく、共感を感じることの出来るあたたかい物語。



『若草物語』
―日常を描く―

吉見明莉

『若草物語』では、全く性格の違う４人の女性の生き様が描かれている。父親が戦争に出征している間、母親と４人の姉妹とで家を守っていく、という物語だ。ある年のクリスマスから翌年のクリスマスまでの約１年の間の話であるが、姉妹はたくさんの幸や不幸に遭遇する。その中で、私は家族愛というものを感じた。

最も印象に残っているシーンは、病気になった父親を母親が看護しに行くための旅費を援助するためにジョーが自分の髪を売ったシーンである。ジョーのこのような姿から女性の強さが見られた。女性は大切なもの、愛するものを守るためならどんな逆境にも立ち向かう強い生き物なのだと思った。もちろんジョーにとって長くて美しい髪を売るのはそう簡単なことではなかっただろうと思う。しかしジョーは緊迫した経済状況の中、そして大事な家族が病気で苦しんでいるという状況の中で、家族を守るために自分の髪を犠牲にした。ジョーは自分の髪を愛情という、形はないが、しかしかけがえのないすばらしいものに変えたのである。この他にも、ベスが病気になり姉妹が一晩中看病をするシーンや、父親が無事に帰ってきたとき大喜びで抱き合い父を迎え入れるシーンなど、家族愛の象徴とも言えるシーンはたくさんあった。

考えてみると、女性が主人公となっている映画やおとぎ話は他にもたくさんある。例えば『白雪姫』などのように、王子様が悪い魔女と戦い最後には主人公である白雪姫と王子様が結ばれる、といった話ならたくさんあるし、人気があるのもわかる。しかし『若草物語』は中流階級の四姉妹のなんでもない日常が描かれているだけで、劇的なことは何も起こらない。それなのに、こんなにも長い間愛され続けてきた。『若草物語』のおもしろさはそこにあるのだと思う。

お姫様の物語に心躍らせるのではなく、誰もが共感できる物語であるゆえにこれまでずっと語り継がれてきたのだ。そして、４人の女性の中で自分と性格や境遇の似ている人物と自分を重ねてみたり、もしくは４人全員と重ねてみることもできる。これもまた、『若草物語』のおもしろさの一つであると思う。そして愛情いっぱいの作品なので心が温かくなる。なんでもない日常なのに、たくさんの愛を感じられる。なんでもない日常だからこそ、共感できる。それが『若草物語』の魅力なのだ。

『若草物語』に見る家族の絆

河 内 康 延

私は、『若草物語』を見るにあたって、家族の深い絆や愛というものが見て取れると感じた。その中で私の印象に残った場面をいくつか紹介したいと思う。

まず、この「若草物語」の時代背景であるが、南北戦争の真っただ中で、かつ家長である父が従軍牧師で出征中ということで、家族全体が不安な空気に包まれるのは必然的であると思われる。しかし、このマーチ家の四姉妹は自前の台本を手に演劇に興じ、戦時中であるという暗さを感じさせない、という描写がなされている。このことから、姉妹の仲が良いことがわかる。また、父が戦地から負傷して帰ってきたときには、家族皆が父の体を気遣うとともに、父の帰還を非常に喜ぶマーチ家の様子が描かれており、姉妹だけでなく家族全体の仲が非常に良く、深い絆で結ばれていることが見て取れる。離ればなれになっていても、お互いのことを思い続けるというのが本当の家族であると考えさせられる場面であったと思う。

次に私が注目したのは母親のミセス・マーチの娘たちへの深い愛である。末妹のエイミーが次女のジョーに嫉妬し、ジョーが苦労して書き上げた原稿を暖炉で燃やしてしまい、ジョーはそれに対して腹を立てるのであるが、その時も母は、原稿を燃やしたエイミーを叱るわけでなく、エイミーに腹を立てて仕返しをしたジョーをただ優しく抱きしめる、という場面がある。自分が母親の立場なら、エイミーもジョーも厳しく叱ってしまうと思うが、どこか毅然とした態度で姉妹の揉め事に対処しているところから、母の強さであるとか、娘たちに対する愛情の深さが垣間見えた。ただ頭ごなしに叱るよりは、自分のした事がどういうことなのかを自分たちに考えさせ、そして反省させているようにも見えたので、なかなか深い場面であると感じられた。

現在、日本では自分の子供を虐待して死なせてしまうという事件や、家族内の不仲から事件に発展してしまうということがたくさん起きているが、私は、この『若草物語』を見て、今の日本の家庭に足りないものが見て取れるような気がした。家庭内のトラブルから悲惨な事件がこれ以上起こらないためにも、まずはこのマーチ家のようにお互いを信頼し、愛をもって接することが必要であると思う。

『若草物語』から読み解く家族の絆と理想の大切さ

谷 脇 裕 紀

『若草物語』とは1994年のアメリカ映画である。Louisa May Alcottの自伝的小説を映画化した作品で、19世紀後半のアメリカを舞台にマーチ家の四人姉妹を中心に描いた作品である。映画全編にわたって19世紀後半のアメリカの田舎町の雰囲気の良い生活が描写されており、私はこの映画がとても気に入った。特に登場人物たちが家族や隣人との絆を大切にする様子、この時代の女性たちが自分の理想を実現していく様子に感銘を受けた。この親しい人たちとの絆という点と、女性たちの理想の実現という点の2つの点に絞ってこれから『若草物語』の映画評論をしてみようと思う。

マーチ家にはメグ、ジョー、ベス、エイミーの4人姉妹と母親の「ミセス・マーチ」と大叔母が暮らしている。父親のミスター・マーチは南北戦争に出兵しており、家にはいないが手紙で家族とやり取りをしている。この一家全員が自分の家族をとても大切にしているのだ。家族の中の誰かに何か事件や事故が起これば、彼らは家族一丸となってそれに対処する。例えば末っ子のエイミーが学校で理不尽な体罰を受けた時には、家族全員でエイミーを心配し抗議文を作った。父親が戦場で負傷したと電報が届くと、母親が見舞いに行くための準備を全員で行い、次女のジョーは自慢だった長い髪を売ってまで母親の旅費を工面した。そして戦争が終わり、父親が帰ってきた時には家族全員で抱き合い、それを喜び合った。

また彼らは身内だけではなく隣人のローレンス家とも絆が深い。ローレンス家の人々もマーチ家に何か問題が起こると必ず協力していた。ミスター・マーチが負傷した時には薬を届け、さらにローレンス家の家庭教師のジョンが見舞いに行くミス・マーチに付き添った。またベスが猩紅熱にかかった時には、ローレンス家の主人が医者を呼び、ベスが回復した後には、マーチ家とローレンス家全員でクリスマスに祝っていた。このクリスマスに全員で歌を歌うシーンでは両家の仲の良さが表現されており、その場にいる全員が両家全員でクリスマスを祝えることに幸せを感じているように私は感じた。これほどまでの家族や隣人とのつながりが現在の日本の家庭にみられるだろうか。家族との強い絆はあったとしても、隣人とのつながりは最近の日本では薄れてきているとよく耳にする。この映画は、上に挙げたようなシーンで姉妹の強い絆や両親を大切に思う気持ちや、隣人の大切さを見る人に思い出させてくれることだろう。

次にこの時代の女性が理想を実現していく姿について論じてみようと思う。19世紀後半のアメリカは強い白人男性社会で、女性には選挙権が与えられず、そのほかの権利においても男性が優遇されていた。この映画では女性が差別されていると感じられる台詞がいくつか出てくる。例えば（英語の台詞は聞き取ることができなかったので日本語字幕の台詞を挙げるが）「女の教育は猫の教育と同じだ」、「男だから選挙権があって好きな仕事が選べる」、「女は夫が選挙権を持ってりゃいい」などである。このような状況では女性は自分の夢や理想を追い求めていくことは難しく、結婚後は主婦として家で家事をするのが当然だと思われていた。しかしマーチ家の四姉妹はそれぞれの夢や理想を強く持ち、それを実現していく。映画の前半部分に四姉妹が自分の理想について語るシーンがあるが、ここでは次女のジョーの夢について注目してみる。ジョーの夢は小説家になることであり、子供の時から小説を書いていた。彼女の小説は注目されることもあったのだが、ファンタジーやフィクションばかりで現実味を帯びておらず、高い評価を得ることは少なかった。執筆活動を続ける中で妹のベスの死を経験し、彼女は自分たち姉妹をモデルにした小説を書きあげる。これが出版社に注目され彼女の長篇小説が出版されることになり、小説家としての成功を手にした。またジョーは大叔母から大きな屋敷を譲り受け、その屋敷を学校として利用することにする。そして彼女は恋人のフリードリヒにその学校を「勉強したい人が自由に学べるような」学校にしたいと言う。私はこの台詞の「勉強したい人」は主に女性のことを意味しているのだと考える。なぜなら彼女はこの映画の中で女性の教育についての心無い中傷に激怒したり、女性の参政権について男性たちと議論したりするシーンがあるし、彼女はあきらめたのだが通えるものなら大学に行きたいと思っていたからだ。そんな女性であるからこそきっとジョーは男性はもちろん、女性を含めて「勉強したい人」という言葉を使ったのだろう、この台詞は女性教育に力を入れていく決意の表れだ。このように、女性であるというこの時代のハンデを背負いながらもジョーは自分の夢を実現する。その姿に私は逆境に屈せず、夢の実現を目指すことの大切さを改めて教えられた。

以上のことから、この映画は身近な人との絆の大切さ、夢や理想を追い求めることの大切さを教えてくれたと思う。この映画を見て私は、家族の温かさと夢を追う女性の強さに触れ、優しい気持ちになったし、夢に向かって頑張る勇気や元気が出た気がした。